

「数理科学」は語る

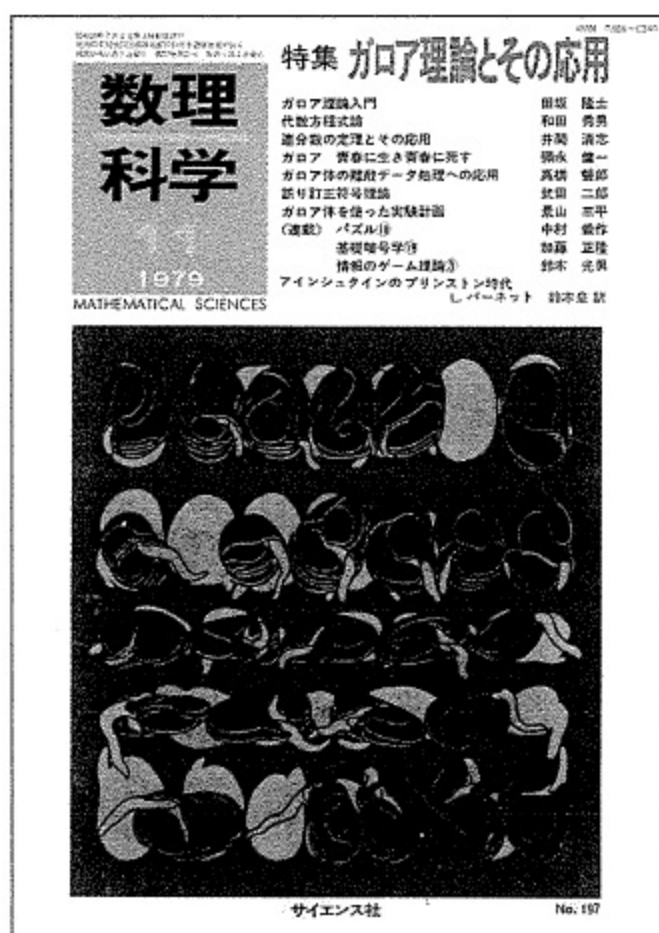
30年前から現代へのメッセージ

彌永 健一

1979年11月号

中学生の頃だったか、父（彌永昌吉）の本棚にあったインフェルトの『ガロアの生涯 神々の愛でし人』（市井三郎訳、日本評論社）を見て、表紙にあったガロアの愁いを帯びた表情に惹かれて読みふけた。1979年11月号のガロア理論とその応用についての特集にガロアについて書かないかと依頼されたとき、彼についてはよく知っているような気がして気安く引き受けた。ところが、手元にあったデュピュイの『ガロア その真実の生涯』（辻雄一訳、東京図書）や、大学の図書室にあったガロア全集（Oeuvres de Galois 1976）などを改めて見て愕然とした。ガロアについての基本的なデータの数々が、それぞれ食い違っていたのである。インフェルトの本にある印象深いエピソードの数々の中にも、事実とは異なるらしいものがあることにも気づいた。締切までの時間に史実についての確認をすることもできないまま悩んでいたが、その一方、全集にあるガロアによる数学の進歩についての文章や、彼がサント・ペラジーの刑務所で書いた論文の序文などを読み、強い共感を抱いた。当時、成田空港に反対する運動は青年たちの心を躍らせ、金や権力で住民たちを踏みつけていた者たちに対する憤りの気持は私の中にも渦巻いていたのである。1830年、フランス7月革命の最中で命がけで戦い、その中で数学に熱中していたガロアの文章にある、権威に対する不信と怒り、数学のダイナミズムについての情熱は、私自身の心にあったものと深く響き合う内容だった。今ではすっかり整理され、代数学を学ぶ者にとっては必修であるガロア理論も、未整理な部分を含みながらも、空をわたる雲のような広がりを持つ体の世界と、結晶のように澄명한群という、極めて異なったものどうしが作用し合う舞台装置として考えられていたのである。

30年前の文章について、今振り返るために、父による『ガロアの時代 ガロアの数学 第1部、第2部』（シュプリンガー・ジャパン）と山下純一氏による『ガロアへのレクイエム』（現代数学社）に目を通して、私の文



章には伝説を定説として受け取っていた部分もいくつかあったことに気づいた。また、ガロアのヴィジョンには、後にリーマン面論として知られる壮大な理論の萌芽が、「多義性の理論」として含まれていたらしいことが、上にあげた全集の前身といえる1897年に出されたガロアの遺稿集の序文の中でピカールによって指摘されていることも知った。再来年（2011年）にはガロアが生まれてから200年になる。ガロアが抱いていたヴィジョンについても改めて評価し、それを時代と数学の流れの中に位置づけるような作業が望まれる。

（いやなが・けんいち、東京海洋大学名誉教授）